

# ハイブリッド形式の国際会議における参加費の設定に関する一考察

次郎丸 沢<sup>†</sup>

<sup>†</sup>株式会社カンファレンスサービス

キーワード：オンライン会議，タイムマネジメント，司会，背景動画

## 1 はじめに

COVID-19 の流行により，2020 年は学術会議を対面で行った学会は 2020 年 4 月に行った日本感染症学会[1]など数える程度しかない．学会の開催状況について正確な統計を取ってはいないが，2020 年に開催予定であった学会の多くは中止もしくは第 5 回国際 ICT 利用研究学会全国大会（以下，本会議と表記）と同様にオンラインでの開催となった．また，弊社が担当した学会はすべてオンラインでの開催となった．

2021 年は Virtual の会議と対面方式の会議を同時進行で行う，いわゆるハイブリッド形式の国際会議が増えてきたが，参加費の設定については事例が少ないことから，筆者はハイブリッド形式の国際会議における参加費の設定について調査し，これまでに聞いた各ステークホルダーの意見なども参考に考察を行った．

## 2 ハイブリッド形式での学会開催

本稿では詳しい説明を省くが，ハイブリッド形式での学会開催の場合、ハイブリッド形式を行うための機材や人員配置のためにコストがアップする一方で，Virtual 形式で参加する方に提供する施設利用料や飲食費に関するコストはダウンする．

総合的なコストが上がるか下がるかは，ハイブリッド形式にかかるコストや施設利用料や飲食費の多寡で変わってくるので一概に断言することは出来ない．

## 3 調査方法

本稿では ACM (Association for Computing Machinery) の Calendar of Events を使用した[2]．そこで以下の条件に合致する国際会議 (Workshop を

含む) を抽出した．

- 開始日が 2021 年 3 月 1 日～2021 年 4 月 30 日まで
- 参加費がウェブサイト等から確認できる
- 同系列の会議は 1 種類とカウント

ここで，同系列の会議は「ウェブサイトのレイアウトが全く同じで，かつ参加費が全く同じ会議を同系列の会議」と定義した．

なお，参加費の種類は①著者 (Author)、発表者 (Presenter)、聴講者 (Listener) の 3 種類を抽出した．著者 (Author) とは発表論文を掲載して発表をする者、発表者 (Presenter) とは発表論文を掲載しない、もしくは Abstract のみ掲載して発表をする者、聴講者 (Listener) とは発表をせずに参加をすることである．

また，参加区分は募集時期が複数設定している場合は最も早い時期の金額を使用し，参加者区分は学術系で最も高い金額を抽出した．例えば，国際会議 ICCEEG2021 の参加費には Early Bird と Regular の 2 区分が設定されているが，Early Bird の方が募集時期が早いため Early Bird の参加費を抽出し，さらに参加費の区分として Regular と Students の 2 区分が設定されているが，Regular のほうが高額であるため，Regular の料金を抽出する [3]．

## 4 結果と考察

### 4.1 会議形式別会議開催数

調査した結果，合計 106 の国際会議および国際 workshop のデータを得ることが出来た．会議形式別開催数とその割合を表 1 に示す．ハイブリッド

形式での開催が 59.4%となっており、ハイブリッド形式の国際会議が調査期間内では過半数となった。2021年3月から4月ではハイブリッド形式が主流であると言える。

表 1 会議形式別開催数と割合

	開催数	割合
Hybrid	63	59.4%
Virtual	36	34.0%
対面	7	6.6%
合計	106	100.0%

会議形式別参加費種別数の割合を表 2 に示す。Hybrid では 90.5%の会議が 3 種類の参加費を設定しているのに対して、Virtual では 63.9%の会議が 1 種類しか参加費を設定していないことが分かる。

表 2 会議形式別参加費種別数割合

	1 種類	2 種類	3 種類
Hybrid	0.0%	9.5%	90.5%
Virtual	63.9%	25.0%	11.1%
対面	14.3%	42.9%	42.9%
合計	0.0%	9.5%	90.5%

#### 4.2 ハイブリッド形式で開催された国際会議の参加費

ハイブリッド形式で開催された 63 会議の参加費を、対面での参加費を基準としたときの Virtual での参加費の割合とその差額の平均を表 3 に、ダイアグラムを図 1 に示す。ハイブリッド形式における参加費は、対面での参加費より Virtual での参加費の方が平均 1 万円～1 万 2 千円程度減額されていることが分かる。

表 3 ハイブリッド形式の会議における対面と Virtual の参加費の差額と割合

	割合	差額(円)
著者	78.3%	11,837 円
発表者	75.0%	10,089 円
聴講者	58.3%	10,230 円
平均	73.7%	11,135 円

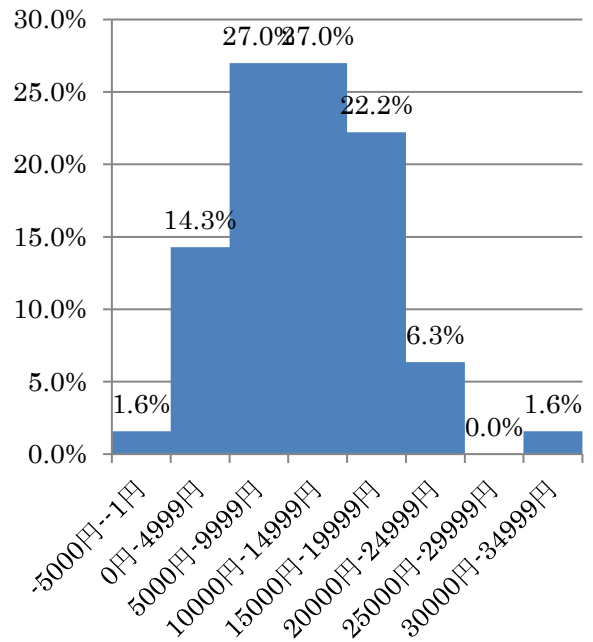


図 1 対面の参加費に対する Virtual での参加費の差額 (全体)

一方で、著者の参加費のみを抽出して作成したダイアグラムを図 2 に示す。最頻値は図 1 と大きく変わらないが、対面の参加費と Virtual での参加費が同一である会議が 8 会議認められた。この 8 会議のウェブサイトには、「来ることが出来ない人のために Virtual の環境も用意している」という文言が書かれていることが共通している。

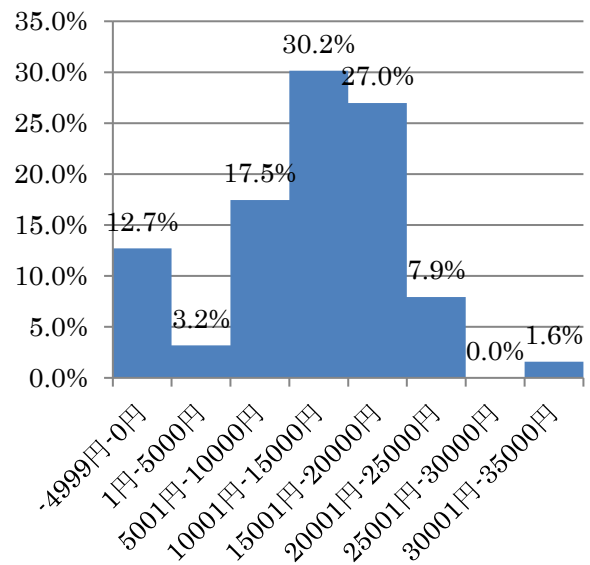


図 2 対面の参加費に対する Virtual での参加費の差額 (著者)

これは、会議としての基本方針が対面方式であるが、来ることが出来ない人に対しても Virtual の環境を用意している、という視点なのだろうと予想している。もしくは、ハイブリッド形式を行うことによるコストと施設利用料および飲食費のコストがバランスしているという事かもしれない。

最後に、聴講者の参加費のみを抽出して作成したダイアグラムを図 3 に示す。聴講者の参加費は著者の参加費よりダイアグラムの山の数が多く、会議の財政面や参加者の増加を見据えながらそれぞれの結論を出したのだと予想している。

ここで「入場制限」と記載している 14.3% (7 会議) のうち 6 会議は、参加者を対面のみに限定しており、1 会議は参加者を Virtual での参加のみに限定している。参加者の参加手法を限定する方法は、COVID-19 の対策になるほか、ハイブリッド方式に掛かる追加費用を抑える事にも役立つ。

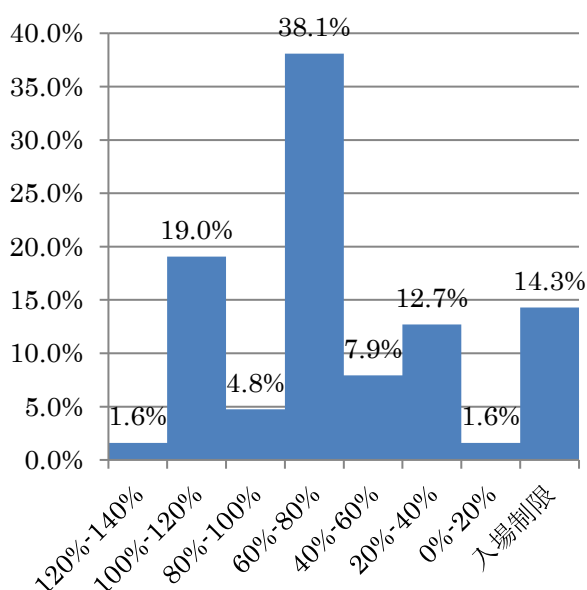


図 3 対面の参加費に対する Virtual での参加費の差額 (聴講者)

## 5 まとめと今後の展望

本稿ではハイブリッド形式の国際会議開催における参加費の設定について調査し考察した。今後は定点観測を続けるとともに、他会議のハイブリ

ッド開催の事例を集めて、より良いハイブリッド形式の国際会議開催方法を検討していきたい。

## 参考文献

- [1] 第 94 回日本感染症学会総会・学術講演会, <https://www.societyinfo.jp/jaid2020/> (2020 年 11 月 10 日閲覧)
- [2] ACM, “Calendar of Event”, <https://www.acm.org/calendar>, (2021 年 3 月 15 日閲覧)
- [3] Registration Instruction, ICEEG 2021, <http://www.iceeg.org/reg.html> (2021 年 3 月 15 日閲覧)